

学長の業績評価について

(評価期間：平成 26 年 9 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日)

平成 28 年 8 月

学長選考会議

平成28年度 国立大学法人茨城大学 学長業績評価 総合評価書

総評	総合評価
	4.2

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各評価を集計し、その平均が総合評価となる

評価コメント
<p>○期待される程度を大きく上回っていると考え。茨城大学で学ぶこと、働くことに誇りをもてる大学づくりを今後とも継続して頂きたい。</p> <p>○学長の強いリーダーシップのもと、周囲とのコミュニケーションも怠りなく大学改革に取り組まれている姿勢を高く評価する。今後の難しい課題もあるが、忍耐強く積極果敢に取り組まれて成果を上げることが期待する。</p> <p>○全体的に大学自体が大きく変わってきた。地域連携では学生も教員も地域に出て行って活動している。今後期待したい。</p> <p>○大学改革に積極的に取り組まれている。今後ともリーダーシップを発揮して教職員全員の意識の共有化を図り、改革を進めて欲しい。</p> <p>○茨城大学が大きく変化したという印象が外部にも伝わっており、学長の手腕が活かされている。</p> <p>○期待する程度を上回った成果があげられていると評価される。今後、研究成果の見える化、入試改革、外部収入の拡大について努力されることを期待する。</p> <p>○全ての分野で学長就任時の抱負が、大学改革を伴いつつ、実行に移されており、多少の遅れが一部に見受けられるものの、時間の推移と共に実行される素地が生じている。大学全体が一体となつての施策の展開がみられる。</p> <p>○本学の改革のための体制作りがほぼ出来つつあると思う。今後具体的な施策を通して教育改革の実現に取り組んで頂きたい。</p> <p>○学長のリーダーシップが適度に発揮されていること、学部や学生の意見聴取が行われていること、広報体制の充実で大学の存在感を上げてきたことは評価できる。一方で、改革の規模が大きく、新設組織も増えていることから、これらが整合的に機能するのか、学部教員の負担が過度にならないかという懸念もある。あまりに無理することなく、着実に改革を進めて頂きたい。</p> <p>○学長のリーダーシップが見えるようになり、外から見ても、茨城大学の方向性がわかるようになってきているのを感じる。このまま改革の歩みを進めて欲しいと思う一方で、改革続きで疲弊してきた面も否定できず、持続可能な改革にしていくためには、どのような工夫が必要なのかについても、検討して欲しい。</p> <p>○平成28年度の運営費交付金のうち機能強化経費に係る配分において97%に減額されたが、減額された金額の多寡の問題ではなく、減額されたということが問題である。このことは、茨城大学の評価に関わる大きな問題であるので、減額された原因を慎重に分析した上で、改善策を明示し、学内の構成員に説明する必要がある。研究面での強化に対する大学としての施策と財政面の改善に特に大きな課題があると思われる。</p> <p>○国立大学法人の中で、茨城大学が客観的にどのように評価されているのか、またどのような位置付け（例えば、学長の業績評価の5項目に関して）にあるのかを、大学構成員およびステークホルダーにわかりやすく伝えることが重要である。そして、茨城大学に決定的に欠けているものを明確にして、それらを獲得するための具体的な戦略を構築して頂きたい。</p>

教育	4.3
----	-----

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント
<p>○「茨城学」の取り組みなど地域に根ざした取り組みの一方、グローバルな視点も大いに取り入れており評価できる。</p> <p>○ディプロマポリシーに基づいた体系的な教育システム構築、および能動的な学修への転換に着手し、一定の成果を収めたこと、包括的な学生支援を実施したことは高く評価できる。</p> <p>○教育改革に関して進展があったと評価される。入試改革に向けて引き続き改革を進めて欲しい。</p> <p>○地域志向教育を実践し、国際プログラムを強化するなど、改革へ向かって進んでいる。</p> <p>○茨城大学生の真面目ではあるが大人しいという評価を、主体的、能動的な教育を取り入れることによって改善していこうという取り組みは、ユニークかつ期待できる取り組みであると思う。</p> <p>○地域創生の知の拠点となる大学・主体性のあるたくましい茨大生の育成に向け、組織改革・制度の設置がおおむね確立され、実践的に各施策が展開され、今後その成果が顕在するものと期待する。</p> <p>○ディプロマポリシーの策定により、教育目標が明確になっていることは評価できる。農業産出額第2位の茨城県に見合った農学部の入学生数の増加は大変良いことであるが、相応の教員の確保や施設の充実を図って欲しい。</p> <p>○今年度に設置した機構、センター等の機能を最大限に発揮し教育システムの改革を進めて欲しい。</p> <p>○「改革加速期間」に応じた教育改革を先導し、大学としての方向性をまず内外に明確にできたことは評価に値する。必要な資源確保が難しいが、掲げた目標の達成のためにさらに尽力頂きたい。</p> <p>○学長のリーダーシップのもと、全学教育機構の設置やCAP制、クォーター制の設定など、改革は進んでいる。ただ、形式だけが進んで、若干慎重な議論に欠けている点が見られるように思われる。そうした状況に対してもリーダーシップを発揮してもらえたらと思う。また、地域の大学として地道な教育活動をさらに大切にしてもらえたらと思う。</p> <p>○学修環境や経済支援などの学生支援の取り組みについては、厳しい財政状況の中で取り組んでいる点は評価できる。しかしながら、学生支援についてはキャンパス間で差があるので、その点の改善が必要である。また、全学教育機構の組織整備やアドミッションセンターの運営については、学長の指導力に基づく、てこ入れの必要があると思われる。</p> <p>○全学教育機構およびアドミッションセンターの設置は教育改革のための組織（枠組みの構築）であり、GPA、CAP制、科目ナンバリング等はすべて教育の質的転換のためのツールにすぎない。それらの枠組みおよびツールを有機的に組み合わせ、教育の質あるいは大学入学者選抜を具体的にどのように変えていくのかの本質的な議論が切に望まれる。</p>

研究	3.8
----	-----

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント
<p>○本学の強み、特色を活かした研究成果をある程度出せたと評価できる。それは、受託研究費増に現れていると思う。今後なお一層、研究分野の充実と成果を期待したい。</p> <p>○知の拠点の構築を通して産業界への貢献が評価できる。</p> <p>○東日本大震災調査団による復興支援や岡倉天心国際シンポジウムを企画するなど、特色ある研究に取り組んでいる。</p> <p>○学長のリーダーシップのもと、地域の研究機関との連携による研究が進んできているように思う。</p> <p>○特色ある研究・地域課題研究等に一定の成果が認められる。一方、地域創生の知の拠点としての研究分野における学部を超えた全大学的研究への取り組みの必要性がある。</p> <p>○茨城地域に特色のある研究に重点を置いた研究を推進している。今後、論文数、インパクトファクターが高い論文誌への掲載数、引用率を高める等に対して具体的な目標数と方策を定めて努力して欲しい。</p> <p>○成果の発信を工夫し、研究活動全般の底上げをさらに進めて欲しい。</p> <p>○基盤的研究の底上げになる施策を進めて欲しい。</p> <p>○特色ある研究成果の発信と若手教員の確保に努めて欲しい。</p> <p>○「戦略研究」認定といった制度は設けられたものの、特色となる研究成果が必ずしも出ていないように思われる。若手も中堅も意欲的に研究に向かえる工夫、研究成果の社会への示し方の一層の工夫が必要である。</p> <p>○研究面については、個々の教員は限られた研究リソースの中で頑張っていると思われる。一方で、研究に対する大学としてのポリシーが外部からは見えてこない。茨城大学としては、研究面に振り分ける大学のリソース(人員、資金)はかなり限定されるので、研究に対する大学の強化として、各部局に対する総花的な対応よりも、茨城大学として強みのある組織的研究と有望な若手研究者へ思い切って傾斜配分するなど、抜本的な改善が必要であると考えられる。</p> <p>○研究に関する大学改革の始点は、それぞれの専門分野の「ミッションの再定義」である。客観的なエビデンスに基づいて明らかになった「強み・特色」をさらに強化・拡充する形で、研究推進を図るべきである。一方で、大学における研究は、その多様性と自主・自立性の担保と裾野の広がりも重要である。それらのバランスをどのようにとるのが、学長の手腕である。</p>

地域連携

4.3

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント

- 「地域創生の知の拠点となる大学」を標榜し、社会連携センターの活動も以前よりも活発化が認められる。学内向けにも茨城学の開講などが評価できる。
- 地域の特徴を生かした改革を推進しており、高く評価される。
- 大学・高専コンソーシアムの結成や、学外の団体企業との連携で大きな成果を収めている。
- 自前主義から転換してネットワークづくりに着手し、連携・協働した地域創りを開始したことは高く評価できる。
- COC事業の統括機構の設立、茨城学やイバラキカクなど「地域の知の拠点」としての取り組みは評価できる。今後さらにCOCプラスの取り組みにより一層の成果が期待される。
- COC事業及びCOCプラス事業の展開により、本学の地域連携活動は大きな成果を生みつつある。今後、コンソーシアムを基礎としての全体的な課題に対応・施策の実行が期待できる。
- コンソーシアムの拡大をはじめ、災害支援など地域に開かれた大学を目指している。
- 学長のリーダーシップのもと、茨城学も定着し、地域の自治体や企業との連携が進んできている。社会連携センターの役割を明確化し、全学としての地域との連携を進めていって欲しい。また、地道な地域連携をより一層大切にし、地域の期待に添えるような大学の可能性を探って欲しい。
- コンソーシアムをはじめ、様々な制度枠組みを設け意欲的に取り組もうという姿勢は評価できる。一方で、社会連携センター等の実施部隊が学部との関係でうまく機能しているかといえば課題は大きい。各センターや学部がどこを目指していくのかより鮮明にして、関係者が活動に意欲的に取り組めるようにすべきである。
- 社会連携センターの各種の取り組みや大学・高専コンソーシアムの取り組みは評価できる。しかし、それが、結果として、茨城大学全体の外部からの高い評価に基づく入試の志願倍率の向上や各種補助金の獲得金額の増加など、目に見える成果につながってきていないと思われる。
- 様々な取り組みが行われていることは評価できるが、それらが具体的にどのような結果に結びついたのかが、伝わってこない。地域からは、大学が「地域の変革のエンジン」となることが強く求められている。
- 社会連携センターを中心に、地元企業等との連携を深めて頂きたい。

国際交流

4.3

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント

- 日越大学への参画やさまざまな交流を通して積極的な姿勢が評価できる。
- 海外派遣学生支援制度の創設、日越大学設立への参加などの取り組みは大変良い。
- これまでの国際交流を発展させ、大学のビジョンに沿った国際化を進めていることは高く評価できる。
- 学長のリーダーシップのもと、国際戦略室ができ、国際交流が進んできている。
- 国際戦略室の設置により、国際交流及び教育のグローバル化が進展し、アジア太平洋地域での教育ネットワークの構築が推し進められていることは、これからの茨城大学の特色を作ることが期待できる。
- 日越大学の設立に参加したほか、海外協定校を増加させた。
- 国際戦略室の一層の活動を期待したい。
- 日越大学への参加、学生国際会議などの面で評価できる。学生交流の受入・派遣は東南アジアが中心となっているが、欧米に対しても、もう少し注力すべきである。
- 国際交流協定の増加等は評価される。地域の特徴を生かした国際連携を強化して欲しい。
- 国際戦略室の立ち上げや学生への経済的支援開始は評価する。他方、プログラム運営や「危機管理を含めた実際の学生対応は学部で」となっている現状があり、学部の負担増も懸念される。「グローバル教育センター」の機能が重要になる。
- 海外大学との連携、英語での授業、留学生の受け入れ、派遣など計画段階のものもあり、実行と成果は今後を待ちたい。
- 国際戦略室が具体的にどのような戦略を策定して、国際交流等を推進しているのかが、学内で十分に共通理解されていない。

大学運営

4.2

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント

○大学改革を重点課題に取り上げ、リーダーシップを発揮して取り組んだことは高く評価できる。組織変更、ガバナンス改革、学内コミュニケーションの円滑化などに成果が見られた。

○リーダーシップと学内のコミュニケーションを両立させて、透明で開かれた大学運営を実現していることは高く評価できる。

○学長のリーダーシップのもと、ガバナンス改革が各分野で進められていることを実感すること。広報分野での学長だより等の発信はすばらしい。今後の課題の一つは、外部資金をどのような施策のもと獲得していくかであろう。

○組織的な運営体制を整備し、積極的に改革に取り組まれていることは評価できる。

○ガバナンスの強化、広報活動の強化などの点で大きな成果を上げていると評価される。今後、財源確保、財源の多様化、競争的研究資金の獲得増大などの点で努力して頂きたい。

○横の連携が図られており、学長の強力なリーダーシップが伺える。

○タテ割組織の弊害を解消すべく、学長直轄の組織を設立するなど、大学改革に本腰を入れている。

○これからの本学の方向性が見えてきたと思う。

○学長のリーダーシップ発揮の一方で、学部や学生からの意見聴取や広報が重視されてきたことは評価できる。一方、様々な中間統括組織が作られ、それらが学部との関係でうまく機能しているかという課題がある。実働部隊がどこであるかを考慮して各分野の課題を検討すべきである。学部がすべてを担えるわけではない。

○学長のリーダーシップのもと、進展している。ただ、たとえばポイント制の導入など、修正の必要な点は残っており、人事・予算をどのように展開していくかは、さらなる工夫が必要だと思われる。また教員や事務職員の仕事量が急激に増えている実態があり、業務の整理が必要だと思われる。

○まずは、財政面での改善が強く望まれる。これは、緊縮財政による改善ではなく、収入を増やすことの改善策を学内の構成員に示さないと学内の構成員の士気が上がらないと思われる。広報についても、かけた費用対効果について、外部の有識者を含めて、きちんと評価すべきである。また、学長、学部長、学部執行部は構成員から日々、厳しい評価の目にさらされているが、一方で、大学執行部内の一部のメンバーについては、その業務が構成員には見えていない。執行部内のメンバーについては、その業務と学長の評価の透明化が望まれ、そのことが、大学執行部体制の強化につながると思われる。

○第3期中期目標・中期計画の策定にあたっては、定量的な現状分析が十分に行われないうまま、評価指標（数値目標）が数多く設定された。学内コミュニケーションが積極的に図られているようだが、それぞれで具体的にどのような意見・要望が出されて、それらに対してどのような対応をとったかについて、全学的に共有されていない。かえって疑心暗鬼を生じることにもなりかねない。

学長選考会議委員

職 名 等	氏 名	備考
株式会社茨城新聞社 代表取締役社長	小 田 部 卓	
学校法人茨城 理事長 種田・鈴木法律事務所 弁護士	種 田 誠	
茨城大学同窓会連合会 会長 前 公益社団法人 茨城県農林振興公社 理事長	福 地 省 行	
国立研究開発法人 日本原子力研究開発 機構 理事（原子力・量子線）	三 浦 幸 俊	
コナエ電気株式会社 代表取締役社長	柳 生 修	議長
茨城県 副知事	山 口 やちゑ	
人文学部長	佐 川 泰 弘	
教育学部長	生 越 達	
理学部長	折 山 剛	
工学部長	馬 場 充	
農学部長	久留主 泰朗	
全学教育機構長	木 村 競	

- ・ 学外委員は五十音順
- ・ 任期：平成28年4月19日～平成30年3月31日（選考会議規則第4条）